

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 205
Tel. (045) 671-1109
振替 00200 - 1 - 47369
E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp HP : w01.tp1.jp/~ja66945502/
発行者 石倉夕子 (題字 松橋 順)

宣教方針

- ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
- ② 地域の問題に関わる。
- ③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会 主日礼拝 日曜日 午前 10 時 30 分より

特別支援教育について

経験を通して

発題 宮崎 祥司さん



お話をする宮崎祥司さん

①支援級在籍の子どもたちの中には自己肯定感・自己有用感の低い子がいまます。障がいのあることが小学校就学直前にわかった子どものお母さんは「これまで我が子と他

宮崎祥司さんは、これまで幼稚園や養護学校、障がいのある人たちのショートステイやデイ活動、そして小学校の特別支援級で仕事をされてきました。今回は最近小学校の支援級で出会った子どもたちの生きていく上での困難さや、またその困難さがどこから来て、どの様に克服していったら良いのかを、悩み試行錯誤しながら、その子どもたちに関わってこられた経験をお話していただきました。また支援教育の魅力についても触れていただきました。

今まで出会った子どもたちの生きにくさ

の子を比較して、どうしてうちの子は○○ができないのだろうと叱咤激励して育ててきた」と話していました。

②ある子どもはすぐにかんしゃくを起し衝動的になって、友だちを怒鳴りつけたりドアを蹴飛ばしたり、時に友だちや職員に手を出してしまうこともあります。意識的・無意識的に他の友だちや教員が嫌がることをしてしまいます。運動会の日この子の祖母が田舎から来てくれました。リレーの選手にも選ばれた孫を笑顔で応援していた祖母に向かって、彼は「笑うんじゃねー！」と怒鳴りつけました。

③ある子どもは3年生生まで集団の中で活動がほとんどできず、職員とのマンツーマンでの活動が中心でした。低学年の頃は雨が降れば水たまりで何時間も遊び、裸で校庭を走り回り、高い柵があると上にのぼったり、とにかく多動でした。そして恐竜や戦闘もののDVDやゲーム漬けの毎日でした。怒るとその対象である相手に突進して突き飛ばすこともありました。

④ある子は1年生の7月中旬まではクラスで授業を受けることができたのですが、夏休み明けから離席が目立つようになりました。友だちや職員に暴言を吐き、叩いたり蹴るといった言動が目立ちはじめ、その後年度途中で支援級に came ました。

⑤支援級の中だけでなく、通常級(30人クラス)に支援を必要としている子どもたちが、1〜2人はいると言われているようです。この子どもたちの中には授業中離席し

たり、大声を上げたり、暴言を吐いたりして授業の進行を妨げたり、休み時間に友だちとのトラブルが絶えないケースもあります。

どのように関わったらよいのか？ (学校での取り組み)

それではこのような子どもたちにとっての良きにかかわっていったら良いのでしょうか？より適切なかわりをするためにまず必要なのが一人ひとりの子どもの実態を知ることです。そして子どもたちのそれらの言動がどのような背景から出てくるのかを探る必要があります。このことを抜きに適切なかわり方は望めません。

①自己肯定感の低い子どもたちの中には、今までの育ちの中で、他の子と比較され、否定され続けてきた場合があります。この子たちからは「どうせ俺なんか」「俺は馬鹿だから」「生まれてこなければ良かった」「藻くずになって消えたい」「死んでやる」などという、自己を否定する言葉が多く聞かれます。また失敗や間違えることを恐れる子もいます。この子たちにはまず、その子の存在を全面的に受け入れることから始めます。そして失敗や間違いをしても良いこと、学校は失敗したり間違えながら学ぶところであることを常に伝えていきます。叱るときもその子どもの人格を否定するような叱り方ではなく、変えていった方が良い言動に対して叱るようになります。またそれらの言動をしてしまったその子の気持ちをくみ取るよう心がけています。

②の子どもの場合「視覚・聴覚的な刺激

に対して過敏に反応してしまう」特性があります。他の友だちや職員の何気ない言動の一つ一つに反応してしまいます。この時は「イヤーマフ」と言って外部からの音刺激が約10分の1に遮断できるヘッドホンのようなものを装着したり、彼の個別学習用スペースを教室の端の方にして視覚的な刺激をなるべく減らすような配慮をしています（場の構造化）。また、この子には笑いと嘲笑という狭い意味でしか経験していなかったという悲しい背景がありました。そこで笑いにはいろいろな意味があること、嬉しいときや楽しいときも人は笑うんだということを学習の中で伝えました。相手の立場に立つて考えることの苦手な子どもにとつて、人の表情理解の学習はとても大切です。

③の子どもには、まず教室内を構造化し、学習する場所と休む場など目的に沿って使用する場を明確に分けるようにしました。また少しずつ良い悪いを彼の分かりやすいような方法で伝えるようにし、1日1日のスケジュールを提示し無理ない形で時間割に沿った学校生活を送るように流れをつくりました。また給食時間に交流級の中に入れていくようにしました。この子の場合、友だち関係が想像以上に良好で、次第に自分から求めて友だちの輪の中に入るようになりしました。このことで大きく変化し、6年生では大変穏やかに過ごすことができ、積極的に楽しんで学校生活を送れるように

なりました。

④今年度の11月下旬夏休み明けから授業中に離席をしたり大声を出してしまうようになった背景の1つが、授業内容が次第に難しくなり、ついていけなくなったことでした。そして支援級に来るまでの間、職員から注意され、叱られることが多かったのです。そこで支援級で立てた方針は、学習内容を彼女の持っている力よりも低めに設定し、「できた」という達成感を持てるようにすることでした。この子は今、100点や花丸をもらい大きな喜びを感じています。そしてもう1つ、なるべくほめるということです。悪い面を叱って育てるよりも、良い面を探してそこをほめて育てる方が子どもにとつても、かかわる職員にとつても、精神的にとつても楽になります。それでもまだまだ相手の心を傷つける「チクチク言葉」は多く、時々手が出ることもあります。少しずつ減ってきています。

⑤ユニバーサルデザインという取り組みが現在学校現場で行われています。この方法論は発達障がいのある子ども達にはもちろん、全ての子ども達にもやさしい（理解しやすい）関わり方（配慮・視覚的な手がかり、少ない容量での声かけなど）です。

一部の教員や保護者の課題

一部の教員や保護者の中には、子どもの実態を十分把握できず、不適切な言動をするケースがあります。

例えば、ある支援学校では子どもへの指導と称して、児童生徒に手をあげることがあ

ります。また子どもの特性を無視した不適切なかわりをする職員がいます。また威圧的・高圧的に子どもたちを怒鳴りつけ、厳しい言葉かけで思い通りに子どもたちを服従させている職員もいます。また子どもたちの名前を呼び捨てにする職員が多いのも気になります。本来子どもたちと職員の間は対等であるべきですが、明らかに上下関係が存在しています。

一方一部の保護者の中には自分の子どもの実態を十分理解・把握せず、子ども自身が家で話す内容がすべて正しいと信じ込んでいるケースもあります。また支援を必要としているクラス内の子どもをいわゆる邪魔者扱いにして、クラスから排除しようと運動する人もいます。またある発達障がいのある子どもの親御さんは「この子は将来科学者にします」と言い切りました。有名な芸術家や科学者、物理学者の中に発達障がいのある方がいるという事実から、この子の将来を勝手に親が決めているとしたら、それはおかしなことです。

またある学校の支援級に通う子どもの父親がアルコール依存症で、定職を持たず子どもにおりる福祉のお金でお酒を飲み、飲めばこの子に対して虐待していたそうです。そのため学校で保護し、児童相談所の一時預かりに措置されました。これらは重大な人権問題です。

支援教育の魅力

ここまで子ども自身の困難さや子どもを取り巻く人的環境の困難さについて話して

きましたが、最後にこの支援教育の魅力について話をします。

以前勤めていた学校でよく若い職員に機会があれば話していたことがあります。それは「この仕事はやりたいたいことを思う存分でき、子どもやお母さん方からお金で買えない宝物をもらい、その上お金をもらうことのできる一石三鳥の贅沢な仕事だ。」と。教育という営みは山登りに似ていると感じています。その子どもの実態に合わせて登る山（目標）を決め、重い荷物を背負い、山のふもとから一歩一歩その山の頂上を目指して登ります。なだらかな上り坂では自分一人で登れますが、急な上り坂では途中で何度も休んだり、時には周りの人がその重い荷物の一部を持ってあげたり、軽く手をつないであげる必要があるかもしれません。岩の壁面を登るときには励ましたり、手や足をかける位置を伝えたり、時には落ちないように支えてあげる必要も出てきます。しかし山に登るのはあくまで子ども自身です。支えることはあっても、強引に引っぱり上げたり抱いて登ってしまつてはいけません。肩に食い込むザックの重みを子ども自身が感じ、額から流れる汗をぬぐいながら苦労して目標である頂上に着いた時、その頂上から見る景色の美しさに感動することでしょう。もしこの山にロープウェイなどがあって、重い荷物を持つ必要も汗をかく必要もなく頂上に登れたとしても、そこから景色を見た時の感動は、自分の足で

【3P 下段に続く】

使信

「サライとアブラム」

石倉夕子

その地方に飢饉があった。アブラムは、その地方の飢饉がひどかったので、エジプトに下り、そこに滞在することにした。エジプトに入ろうとしたとき、妻サライに言った。「あなたが美しいのを、わたしはよく知っている。」

エジプト人があなたを見たら、『この女はあの男の妻だ』と言って、わたしを殺し、あなたを生かしておくにちがいない。

どうか、わたしの妹だ、と言ってください。そうすれば、わたしはあなたのゆえに幸いになり、あなたのお陰で命も助かるだろう。」

アブラムがエジプトに入ると、エジプト人はサライを見て、大変美しいと思った。アラオの家臣たちも彼女を見て、アラオに彼女のことを褒めたので、サライはアラオの宮廷に召し入れられた。

アブラムも彼女のゆえに幸いを受け、羊の群れ、牛の群れ、ろば、男女の奴隷、唯るば、らくだなどを与えられた。

(創世記12章10節〜16節)

今日の物語は放浪する遊牧民、それも小さい集団の遊牧民の体験が元になっていると考えられます。10節で「この地に飢饉があった」とあります。これによつて今日の主人公たちはエジプトへ逃れるのですが、放浪する小さな遊牧民の集団にとつて飢饉から逃れる時にどのようにして逃れたかというのを伝承しているお話です。飢饉すなわちいのちの危険からの救済方法です。危険ではあるけれども財産も権力もない彼らの唯一有効な「いのちの助かる方法」です。遊牧民にとつて飢饉の問題は大きい問題で、いのちに直結するものでした。創世記の中で今日のテキストと同じモチーフ(背景)が20章に(やはり名を変えたアブラムとサライがペリシテ人の地でアビメレク王に対して同じ策略を行なう場面)そして今一つは26章です。26章はアブラハムの息子イサクとその妻リベカのお話です。やはり父親や母親と同じ策略を行なうのです。この3つの記事の中で一番古いものがおそらく今日の物語でしょう。この物語群は飢えによる危機と母親の危機における家族の維持(母親を危険に晒すことによつて家族を維持する)です。今日のテキストではサライは一言も言葉を発していません。ただ沈黙をしています。アブラムはどうかというとき彼女に妹だと言うように頼みます。その際に彼女の美しさを褒め、12・13では懇願の言葉となつていきます(どうかして下さい)。小さい遊牧民の集団が生き残るためにアブラムは策略家となります。

《4P 上段へ続く》

ナーウナン

父「最近、人形たちといっしょに寝なくなったね。」

仲良しじゃなくなっちゃったの?」

花「そんなことないよ。」

ときどきみんなで『のみかい』やってるもん」

(大人たちは「かいしゃ」で「かいぎ」と

「のみかい」ばかりしていると思ってる) 幸前花 9歳

【2Pからの続き】
登った時のそれはまったく別の物でしょう。わたしは前者のこの深い感動を子どもたちに経験させてあげたいといつも願っています。

子どもが「わかった」「できた」と顔を輝かせてくれる時、今まではめられなかったボタンを自分一人でかけることができた時、なかなか身につかなかった「パン」というサイン言語を自分で表現できた時、それまでの苦勞はすべて吹き飛び、その喜びを共に味わうことのできる幸せをしみじみ感じます。

「障がいがあるということがイコール不幸せな訳ではない。ただ不自由だけ」と言ったのは、以前わたしが勤めていた学校の校長です。日々障がいのある子どもたちとかかわるなかで、何かを教えたり伝えたりすることはほんのわずかであると気づきます。むしろこの子どもたちとかかわる中でわたしが心を豊かにしてもらっています。ですから「障がいがあつて何が悪い」という一種の居直りがわたしにはありません。

障がいのある子どもたちが「自分は生きていていいんだ、生きていてよかった」と思えるように、そしてその子どもを支えている家族、学校や施設の職員たちが、その子どもを育てることで幸せを感じられるようになっていけたら良いと思っています。そのために微力ではありますが、現場にこだわり続けて働いています。(宮崎祥司)

《3P3 段目からの続き》

その時の道具がやはり女性なのでした。サライは民族の身の安全と、更には富との交換の品目なのです。ここでも女性は民族を守り維持していくための道具となってしまうのです。

私は今日のテキストから信仰的なことは全く読み取れませんでした。エジプトの王、パロにいたっては、アブラムの策略によつて神に裁かれてしまいます。とても理不尽なお話です。族長の祖とされるアブラムの時代、それは神が創造された男と女の秩序が明確に崩れ去つた時代に入ったのだと思います。そのことにおいてこのアブラムとサライのお話は重要なターニングポイントなのです。ある集団が存続の危機に陥つた時、常に犠牲になるのはその集団でより弱いものたちです。それは歴史が証明しています。いやそんなことはない、特

に女性は実は後ろで男性を操っている時もあるのではないかとという反論もあります。それすら生き残るために仕方ない行為かも知れませんが、決して進んでそのことを行なっているというのは歴史の上で稀だと思えます。多くは犠牲になります。

現在、従軍慰安婦に関して、かつて無いほどバッシングが行われています。事実ではないというバッシングです。アブラムが集団を守るために妻であるサライを犠牲にしたのと同様、いつの時代も女性たちが男性たちの、もつと言えば国のためという美名のもとに犠牲になっていく。そのことを思わずにはいられませんでした。

私は今日のお話の前半で、今日のお話から信仰的なことは読み取れないと言いました。聖書を読む時、無理矢理、信仰的な観点に結びつけようとする、大きな間違いを起こしてしまいます。今日のテキストも

そうです。ここでパロが神によって罰せられたことにより、そしてアブラムたちが餓えから救われただけではなく富も得たというお話で、めでたしめでたしとなると、神によって守られたのだ、全ては神の計画の中にあるのだと語ってしまいがちになります。しかしそう読むことでアブラムの罪はゆるされてしまい、サライの犠牲は美談となってしまうのです。従軍慰安婦が、女子挺身隊という美談にされてしまうように・・・。今日のテキストにはサライの言葉は一言もありません。このサライの沈黙に私たちはこころを傾けたいと思えます。



風景

三ヶ月前、大間原子力発電所の建設差止め訴訟で意見陳述をするため函館(函館地方裁判所)に向かった。今回の陳述は「子どもの立場」ということで子どもの権利条約を主としていた。しかし、当日裁判長が何の事前通告もなしに意見陳述を認めなかった。その後、裁判長と原告側との間でやり取りが続いた。文字が制限されているのでそのやり取りの内容を書けないのが残念だが、その時の率直な感想はあれが「民主主義国家の裁判官(裁判長)か」だった。後で弁護士さんが、あれは例外で裁判所全体がそうでは無いく行つてくれて少し安心した。

しかし、その裁判長が今度東京地裁に配属される事を聞いて、今回の様な裁判長が「成績の良い裁判官」として評価されているという事を思い知らされた。その裁判長は今頃東京地裁に居るのだろうか。どこに配属かは聞いていないが、自分が住んでいる場所を管轄している裁判所にその裁判官が居ると思うと、正直ゾツとする。

石倉 遊葉

まど

◇3月27日、現在中学3年の息子が一大決心をして、大間原発差止め訴訟の15回目の口頭弁論で陳述をする予定だった。陳述すること

様子。

◇本日に正義が行われているのか。既に結審した北村慈郎牧師の裁判、そして今まさに係争中のマツサンバさんの難民認定不許可取り消し裁判。「担当の裁判官に全て左右される」これが日本の裁判の現実だとしたらあまりにも腹立たしい。

◇「正義を洪水のように、恵みの業を大河のように尽きることなく流れさせよ」アモスのこの言葉が深くからだに染み込む出来事だった。(石倉夕子)

編集後記

共生へ、偏見から寛容へ、上下関係から平等へ、争いから平和へ、憎しみから愛へ。(宮崎)